

入学志願者と入学後に研究指導を希望する教員との事前相談についての 公平性・公正性の確保について

1. 目的

事前相談の適正な実施に向けた基本方針について、入学者選抜の公平性・公正性を確保する目的で、受験者に向けたガイドラインを公表・周知する。

2. 事前相談の定義

事前相談とは、志願者の研究関心と指導教員の研究分野との適合性、ならびに受入体制の確認等を行うことをいう。

3. 事前相談への対応

- ① 入試の可否に関する発言を行わない。
- ② 本学の試験内容に特化した試験対策や模擬面接など、公表されている情報を超えた直接的な支援を行わない。ただし、本学が公表している過去の入試問題等の Web サイトへの誘導（各研究室ホームページにおける公知の情報提供を含む）、または卒業研究発表の研究指導など通常の教育課程内で実施する教育活動の範囲は可とする。
- ③ 出願書類として研究計画書等の提出を求め、それらの評価が合否判定に関わる場合、提出する研究計画書等の記載内容に対して、公表されている情報を超えて、合否に関わる指導を行わない。例えば、提出する研究計画書等の構成・表現・文体等の直接の添削や改善指導を行わない。また、「この計画は合格しやすい」など評価に関する発言や「ここを修正すれば良くなる」など修正の提案はしない。ただし、指導教員が、研究テーマの妥当性や研究分野との整合性の確認、および単に聞き取りをすることや面談をすることについては論文を読むことと変わらないことから可とする。
- ④ その他、特定の志願者に対し、便宜を図る行為を行わない。

4. 入学者選抜の公平性・公正性確保の観点からの出願書類準備について（公表情報）

① 研究計画書等（志望調書）の構成についての一般的な考え方

- i. （進学・就職など共通した性格として）面接試験は、人物・人柄・性格についての確認よりも、その本人が既に有している能力についての判定の機会であることに留意すること。さらにその判定は、根拠（エビデンス）があることが前提となることを理解すること。したがって、その判定を行う面接の場に予め提出されている研究計画書等には、その根拠（エビデンス）が具体的に列挙され、本人の能力の強みが説明されていることが期待される。
- ii. よくある間違い✕（○が推奨例で、※が留意点）
 - ✕ 「私は明るい性格です。研究室に入ったらいろんな人と協力して研究ができます。」（人物・人柄・性格の話に終始し、根拠が示されていない）
 - 「学生プロジェクト※※※で、チームリーダーを務め、プロジェクト成果■■■が得られた。」または「学生プロジェクト※※※で、作業進捗係を務め、プロジェクトが滞りなく進められた。」または「学生課題※※※で、★★★の難題に取り組んだが、□□□という提案を行い、課題達成できた。」など。
 - ※ 明るい、気さく、など「性格」の側面の記載ではなく、問題解決能力、コミュニケーション能力、予定管理能力など、同じことを書く場合でも「能力」に紐づけて記載することに注意。
- iii. 全体構成について
 - ※ 長さの問題：研究計画書等（志望調書）は、根拠の列挙であるから、与えられたスペース（例えば A4 一枚）に対して、少数行しか記載がないという場合は、能力を示す根拠が乏しかったか、入学の意思が低い（とりあえず滑り止めで受験しておこうなど）準備に時間をかけなかったことが推定される。A4 一枚に対してページ追加できる場合もあるが、**A4 一枚ならば A4 一枚いっぱい書いて隙間を作らない**（一枚増やして、二枚にするなら A4 二枚いっぱいを書く。ページを増やして、隙間を作るなら「なぜページを増やしたのだろう？無駄な隙間ができるなら、一枚に入ればよかったのに。一枚に収める文章構成能力が足りなかったのだろうか？」という疑問が発生する）。
 - ※ 説明の方法：一般には、調書に沿った説明を冒頭に求められる可能性がある。その場合、面接で「何を勉強してきたか」「志望動機」をそれぞれ、予め提出した調書に沿って、それぞれ 30 秒程度（全体で 1～2 分以内）で要約を話せば、後の口頭試問で十分な返答時間が確保できることになる。各要約は、何度も事前に練習し、暗記して（たとえどしくなく）円滑に話せると良い（緊張して舌がもつれる人もいたので、急いで話せば良いという意味ではない）。

iv. 調書の記載（得意な科目、卒業研究など）

A4 一枚に記載する場合でも、以下の内容（得意な科目・学生プロジェクトなど・卒業研究）を3ブロックに分けて記載するとわかりやすい。

1) 得意な科目（基礎学力の確認）

出願時には成績表も提出するため、面接官は志望調書と成績表を一緒に見ることになる。そこで成績の良かった科目名（成績表と照合できるよう簡略化したり、曖昧な一般名にしたりしないこと）とその科目に関して特に関心があったキーワード（専門用語や理論名など）を添えるのが良い。科目名やキーワードが無記載だと、面接官の質問がどこから来るか予想が困難となり、面接対策に影響がでる。面接官は、得意であることの理解度を測るので（不得意といっている科目を聞くのは、面接として不当であるとの考え方から）、**面接での口頭試問に十分に準備できる科目とキーワードを示しておくのが良い**。逆に、成績が良くなかった科目でも（後で克服して理解が深まったなど）、口頭試問で十分に返答できる確信があるものは、そのキーワードと共に書いて、口頭試問に備えると良い。

※ 口頭試問では、専門用語や理論を十分理解しているか確認を受ける。黒板やホワイトボードなどを準備している受験会場（zoomの場合でもペンと紙の準備）も多く、その場合は、口頭で説明するよりも、式をその場で、書いて見せることが、最もシンプルで、効果的な返答となる。確実な評価点の取得に向けては、「では式で書いていいでしょうか？」と質問後5秒で正確な理論式を書き始め、定義や式の意味の説明ができることが望ましい。自分が書類に記載したキーワード（書いてないが重要関連事項）は、すぐに式で書けるように準備しておこう。質問後5秒～10秒で答えられない場合は、「すみません。※※ならわかるのですが」などと、自分の得意な範疇での解答を提案するのも、得策であろう。

2) 学生プロジェクトや多人数で協力して達成する課題（協力・協調能力）

上段で、基礎学力をしたのちは、一人で独断的に研究をするのではなく、大学院研究室に配属し、他の学生と協力関係が築けるかの確認に入ることが多い。ここでは、前述のように「学生プロジェクト※※※で、チームリーダーを務め、プロジェクト成果■■■が得られた。」などと記載し、特に、自分がどのような役割を果たし（あるいは提案）、その**役割や提案がどのように寄与して、プロジェクトや課題が遂行されたか**、具体例を示して書くのが良い。面接の際は、その提案の新規性や十分性（どのくらい役に立ったかなど）が質問されることが多い。

3) 卒業研究

最後に、研究能力の確認のために、現在の研究課題とその取り組みについて、卒業研究について記載する。具体的な課題（専門用語、キーワードを入れて）を記載し、何が「未解決の問題」（**研究目的**）で、「どのような方法やアイデア」（**仮説や手法**）で、「どう解決していくか」（**実験計画やシステム開発手順**など）を、比較的簡潔に（A4一枚の場合、記載スペースは1/3程度と推定されるため）記載する。面接の際は、（研究目的や課題が、卒業研究の指導教員から与えられたものの理解不足がないかどうか）、「なぜそれが問題であるのか」「他の方法でも解決できるのではないのか」など、否定的な観点から質問されることが多い。本人の理解度（教員から与えられた文言を繰り返しているだけなのか）、研究能力として、自分自身でも提案方法が有効であるかを逆説的に考えた経験があるかどうかなどを確認される。その提案の**新規性**（他の方法だと何が不足で、限界なのかなど）や**有効性**（具体的にどのように役立つことが期待されるか）について質問されることが多い。

v. 調書の記載（志望の動機など）

以下の内容（研究したい内容・配属希望の研究室との整合性（マッチング）など・将来計画）を3ブロックに分けて記載するとわかりやすい。

1) 研究したい内容（研究内容の確認）

出願前に、配属志望する研究室（複数可）を訪問するなどして、それら教員との事前相談をしておく必要がある。それは、書類に記載した「研究したい内容」が、本人がこれまで得た（特定分野での）基礎学力、プロジェクト経験、卒業研究などの延長において、記載した研究内容を十分実施できる準備が既に整っているかどうか、について確認されるからである。そこで、記載は「**そもそもなぜその研究に興味関心があるのか**」「**今持っている能力はどのようにその研究に活かせると考えるのか**」「**その研究は、社会や多くの人にどのように貢献すると思うのか**」という論理で書くのが良い。また、配属志望研究室が複数ある場合に、ピンポイントで第一志望の研究室に関連した研究テーマだけを書くとは不安という場合は、少し広げて書く工夫があっても良い。一方、全く分野や専攻が異なる研究室を複数記載するのは推奨されない。志望研究室ごとに動機を分けて書く、という方法もあるが、一般的には志望動機は一貫性があることがわかりやすいし、評価する側にも伝わりやすいと考えるからである。もちろん、志望研究室ごとに動機を分けて書いた場合でも、それぞれ論理的で説得力があれば、問題はない。

- よくある間違い✕（○が推奨例で、✕が留意点）
- ✕ 「私の祖父が関節痛で、子供の時から祖父を助けたいと思っていました。それで、障害者支援器具開発に関心を持ち、本研究科で研究したいと考えました。」（面接官は、公平性のため、個人の家庭状況、宗教、信条について質問することができない。そのため、個人的な状況を動機として書くと、面接質問もできないし、加点もされない）
- 「幼少の時に祖父が関節痛を患っており、それを契機に障害者支援器具研究に関心を持った。近年の支援具技術は、3D プリント技術や人工知能技術の進歩で、個人個人の特性に合わせて開発・製作できると知り、さらに最新技術を学びたいと考え、本研究科を志望した。」
- ✕ 個人的なことは最低限に留め、学問分野の話題、具体的な関心項目を示し、特定の誰かではなく、社会や多くの人の助けになるという論理展開にするのが良い。

2) 配属希望（配属先とのマッチング確認）

上述の研究内容ができる研究室として、**配属志望する研究室（複数可）の具体的研究内容、キーワードを記載**する。ここでは、実際に配属志望先に訪問（あるいは事前相談）するなどして、それら教員から情報を得たかどうかを軸に、マッチングの確認が行われる。マッチングでは、配属先の研究室の研究内容だけでなく、個人単独の掘り下げ型で研究を実施するのか、あるいはチームで複数人が協力して研究を実施するのか、研究室での日々の活動(生活)など、について、出願者が事前に確認し、理解したかが重要となる。研究内容自体のマッチングが高くても、実際に配属してみたら、本人が想像した状況と違って、その結果不登校につながるような事例もあり得るため、留意している。地理的・時間的（連絡を受けていたのに教員が対応できなかったケースもあり得る）問題で、十分に配属先の情報が得られなかった場合は、本人の責ではない部分もあり、面接では他の教員が、本人が志望先を具体的にどのくらい理解しているかの質問をする可能性がある。具体的には、その研究室でどんな研究をしているかのキーワード（理論名や技術名）と、何が「未解決の問題」（研究目的）で、「どのような方法やアイデア」（仮説や手法）で、「どう解決していくか」（実験・システム開発方法など）が説明できれば良い。

3) 将来計画（入学して修了後、どんな社会貢献を目指すか）

必須ではないが、上述の1)、2)の記述の後に、修了後の進路（進学や就職）、就職ならどのような業界で、どう活躍するか、あるいは国際的なフィールドでどのように貢献できるかなど、記載できれば良い。研究科独自の取り組み（本

研究科なら、カーロボ AI 連携大学院など)、出願先のユニークな取り組みに対し、参加・貢献の意欲があれば、具体的に記載すると良い。また、国際的な取り組みなどについて記載した場合は、(前段の「学生プロジェクト」等の記載に添えても良いが) 具体的にこれまで英語検定試験 (TOEIC など) の最高点数は何点だったかなども有効なアピールポイントになる (検定試験証明書が出願書類に求められていなければ、提出の必要はない)。

② よくある質問 Q&A コーナー

(公平性・公正性の観点から、問い合わせがあり次第、Q&A を公知情報として掲載します。)

☒ Q1 「」 ()

☐ A1 「」 ()

※ 。

—以上—